



① 河川側から中央ホールを望む。秋田杉の無垢材によるアーチを照らす光が賑わいを外部に広げている



② 正面エントランスのキャノピー下はイベントスペースでもある ③ 河川側は遊歩道が整備され、夜には建物の姿が川面に映る

国内外の多様な人びとが交流し 地域活性化を支える拠点

秋田県能代市ニツ井町は、江戸時代の参勤交代でも利用された羽州街道沿の要衝。米代川を越える街道の難所でもあった。現在は、秋田自動車道と太平洋側の東北自動車道を接続する自動車専用道路の整備が進む。これまでの「道の駅ふたつ」は、ニツ井総合観光センターを中心として、歴史

資料館、農産物直売所など複数の施設で構成されていたが、日本海沿岸東北自動車道の延伸に伴い、この地がインターチェンジなどの用地となることから、これまでの機能を1棟に集約した新しい「道の駅ふたつ」の移転整備が計画された。道の駅とは、地域の創意工夫により道路利用者に快適な休息と、多様で質の高いサービスを提供する施設と定義づけられて

いる。「道の駅ふたつ」の整備にあたっては、この機能に加え、地域の魅力を発信し交流できる場であり、まちづくりとも連携した地域振興のための拠点として位置づけられた。また、一級河川米代川沿いにあるため河川側には国土交通省により河川防災ステーションを整備。緊急復旧用資材や車両格納庫、ヘリポートなどが整備され、災害時の拠点となるほか、平常時は

「道の駅ふたつ」との一体的な利活用が期待されている。道の駅としては高速道路のインターチェンジ側が正面だが、反対側も川の魅力が楽しめる玄関でもある。コミュニティバスや高速バスの停留所でもある道の駅には、平日も多くの人びとが訪れている。今後は世界遺産「白神山地」など、秋田県北の周遊観光のゲートウェイとしてインバウンド観光を支援する機能も期待されている。





道の駅ふたつ「きみまちの里」

■道の駅ふたつ整備事業建設工事
所在地 秋田県能代市ニツ井町小繁
事業主 能代市
設計 設計チーム木協同組合
施工 大森・サンワ・成田特定J.V.
電気工事 姉帯電気工業株式会社
竣工 2018年3月

秋田杉の無垢材が創り出す空間を 多彩な照明手法で演出

計画にあたっては「木都能代」を象徴する地場産の秋田杉を活用し、施設からの眺望に周囲の自然景観を取り込み、豊かな自然環境の中でくつろげることが求められた。プロポーザルによって担当した設計チーム木協同組合では、秋田杉の無垢材によるアーチで構成されたホールを中心に低層棟が左右に伸びるプランを提案。中央のホールから七座山や米代川が眺望できる点も評価されたという。

照明計画にあたっては、ホールではアップライトによって無垢材を束ねて編んでいる秋田杉の美しさを強調。外部からその美しさが見えるように配慮されている。

産直・物販コーナーでは、天井を支える木材の間にペンダントを配置してベース照度を確保するとともに、器具が目立たないように配慮。両側の壁面に導光板照明を用いることで、器具の存在感を抑えながら鉛直面照度を確保、空間の明るさ感を高めている。

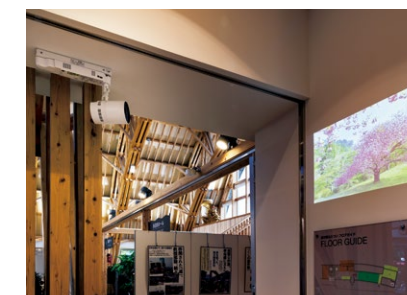
「平成18年3月に旧能代市と旧ニツ井町が合併し能代市となったが、この地域でも少子高齢化は大きな課題で、地域の元気は失われつつある。『道の駅ふたつ』は、移転を契機とした事業だが、市長をはじめ多くの市民が、この事業をきっかけとして地域の賑わいを創出し、地域の活性化につなげたいと熱望している。さまざまな人が交通の要衝で交流し、地域の特産を知り、それが発信されていくという構想通りの姿が実現することを期待している」と能代市ニツ井地域局の職員は語る。



秋田杉による構造とペンダント照明が調和した米代川が一望できるレストラン



子供の豊かな表情が撮影できるように採用されたキッズコーナーのiDシリーズ(美光色タイプ)



インフォメーションセンターに設置されたSpace Player



ジオラマと映像・音響でニツ井の資源を紹介

主な電気設備

- LEDベースライト iDシリーズ
- LEDベースライト iDシリーズ(美光色)
- LEDダウンライト
- LEDペンダント
- LEDダウンシーリングライト
- LEDブラケット
- LED投光器
- Space Player
- スピーカーシステム

◀ (上) ガラスカーテンウォールから米代川と七座山が望めるホール
(下) 導光板照明やペンダントで照明の存在感を抑えた産直・物販コーナー

